

3D都市モデルが世界大会の課題に

周南市

周南市が整備した3D都市モデルが、国際的な学生向け設計競技「第15回学生BIM&VRデザインワールドカップ（VDWC）」の設計課題に採用された。市はこの都市モデルを3月に公表し、オープンデータとしての提供を開始。徳山駅から周南市徳山動物園までの中心市街地が競技対象エリアに設定され、国内外の学生による先進的な提案が期待されている。

VDWCは、建築や都市デザイン、土木・交通分野の設計を学ぶ学生を対象に、BIM（ビルディング・インフォメーション・モデリング）やVR（仮想現実）を活用した都市空間提案を競う国際コンペティション。第15回大会は「動物園に続く道―パブリック・エンターテインメント・プロムナード―」をテーマに、都市の回遊性や賑

わいを創出する新たな空間デザインを募集する。エントリーは4月1日から始まっており、締切は6月30日。最終審査は11月20日に東京都内で開催される予定だ。

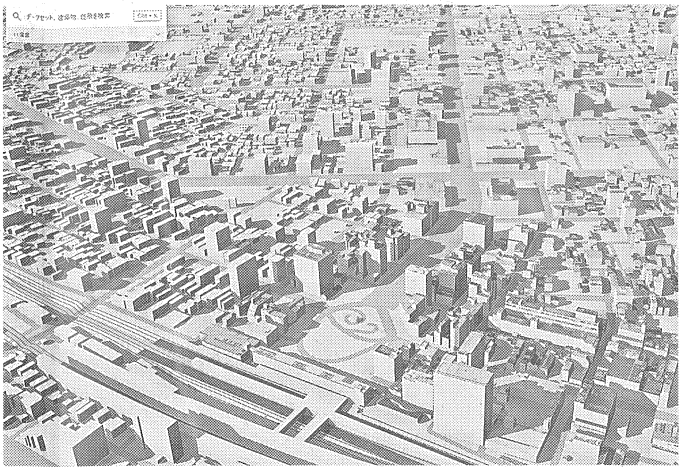
藤井律子市長は「本市を舞台に、柔軟な発想と最先端の技術を生かした提案が生まれることを大いに期待している」と述べ、地元学生の積極的な応募も呼びかけた。

3D都市モデルは、国土交通省が全国で展開する「PLATEAU（プラトー）」プロジェクトの一环として整備されたもので、事業費は約2056万円。県内では周南市が初の整備事例であり、全国でも約250都市に限られている。

構築されたデータは、徳山駅から動物園までのエリア（約0・47㎢）を屋

根の形状や高さ、用途などの属性情報を含んだ高精度なLOD2、湯野、久米、熊毛、須々方、鹿野地区の一部を含む広範囲（約205㎢）を建物図形に高さ情報を与えた「箱モデル」のLOD1。国交省の「PLATEAU VIEW」を通じてブラウザ上で誰でも閲覧可能で、活用範囲の広さが注目されている。

藤井市長は「3D都市モデルは防災、土地利用、都市計画など様々な分野での活用が見込まれる。本市でも説明会の資料や景観シミュレーションなどに役立てたい」と述べるとともに、「市民や学生、民間事業者が自由に使えるオープンデータとしての利便性が、まちづくりの新たな可能性を広げていく」とその意義を強調した。



3D都市モデルで徳山駅(手前左)から岐山通りをのぞむ。中央には市役所